歴史館だより　127号

2025.1.31
茨城県立歴史館

布袋図　雪村周継筆　板橋区立美術館

目　次

1　展示紹介

開館50周年記念特別展 「雪村ー常陸に生まれし遊歴の画僧ー」

2　史料紹介

①「（東京市内電信興行諸費概算）」（歴史資料課）

②　明治期茨城の鉄道のあゆみー水戸鉄道、常磐線を中心としてー（行政資料課）

3　トピックス

令和6年度　下半期の歴史館

展示紹介

開館50周年記念特別展「雪村―常陸に生まれし遊歴の画僧―」

令和７年２月15日（土）～４月６日（日）

茨城県立歴史館は、令和６年度に開館50周年という節目の年を迎えました。当館では、これを記念して、郷土が生んだ戦国時代の画僧・雪村周継について紹介する展覧会を開催いたします。雪村は、常陸国（ひたちのくに）の部垂（へたれ）（現在の茨城県常陸大宮市）において、佐竹氏の一族として生まれたとされます。幼くして出家し、太田（現在の常陸太田市）の正宗寺（しょうじゅうじ）などで画業の修練を重ね、のちに会津、そして小田原や鎌倉を訪れて画才を磨き、晩年は会津や三春（現在の福島県田村郡三春町）を往来しながら、数多くの傑作を生み出しました。その大胆でユニークな構図、自由かつ伸びやかな作風は、後世に大きな影響を与え、近代には岡倉天心らによって雪舟と並ぶ水墨画家と称揚されました。現在、その個性的でバラエティに富む作品の数々は、国内外から大きな関心を集めています。

また、雪村は、絶え間ない戦乱の時代に、京都から遠く離れた東国（とうごく）で活動し、独自の画境を切り開きました。それは雪舟のように中国に渡ることはなく、武家の出自を負った画僧として常陸、阿武隈の山野を遍歴して培われたものです。半生を過ごした常陸の地をはじめとして、東国の風土や文化的土壌が雪村の画業や人格の形成に大きな影響を与えたと考えられます。

本特別展では、今なお国境をも越えて広く人々を魅了する雪村の名品のほか、雪村に影響を受けて常陸・会津で活動した画家の作品を紹介することで、本県および周辺地域の歴史と文化の奥深さに迫っていきます。

布袋図　雪村周継筆　板橋区立美術館

自画像　雪村周継筆
大和文華館

【展示構成】

第１章　常陸からの旅立ち

雪村は、戦国大名である佐竹氏の一族として、常陸国に生まれたとされます。80 歳代半ばまで生きた雪村は、その生涯の前半を常陸国周辺で過ごし、絵の制作にあたっています。

初期の画風は、中国の宋・元時代に宮廷で描かれた院体画風の精緻なものから、明時代や朝鮮王朝時代における浙派の影響を受けた勢いあるものまで幅広いです。雪村はこうした絵の様式を、佐竹氏や小田氏、古河公方の足利氏といった常陸周辺の有力氏族が所蔵していた作品を見て学んだものと考えられます。

本章では、大陸からもたらされた絵画を参考に絵の修練を重ねながら、壮年期に向かうにつれて自己の個性を確立していく様子を、常陸滞在時期の作品から見ていきます。

風濤図　雪村周継筆　野村美術館

弾琴図　雪村周継筆　正木美術館

第２章　禅僧としての画業

雪村は、禅僧でありながら絵を描く画僧でした。雪村が晩年に描いた《自画像》は、袈裟を纏った姿で描かれており、禅僧としての自負のようなものが垣間見られます。

また、京都や鎌倉における五山僧との繋がりも雪村の画業に大きな影響を与えました。彼は小田原北条氏ゆかりの早雲寺（神奈川県箱根町）開山である以天宗清の肖像を描いている他、景初周随や策彦周良といった禅僧の賛文が付された作品もあり、京都や鎌倉における五山僧との繋がりが確認できます。こうした禅僧との交流は、時には寺院に所蔵されていた古画を実見し、画才を磨くことにも役立ったと思われます。

本章では、雪村の禅僧としての側面について、彼の書跡や書翰の他、関係する僧侶の肖像などを交えつつ見ていきます。

渡唐天神図
雪村周継筆、策彦周良賛
茨城県立歴史館

潭底月図
雪村周継筆
大和文華館

第３章 山水の筆様

室町時代において、大陸からもたらされた中国名家の絵画は、日本の水墨画家たちの絵画制作の規範とされました。とりわけ参考にされたのが、南宋時代の宮廷画家である夏珪や馬遠、画僧である牧谿や玉澗などによる作品です。こうした画家たちの構図・描法を類型化した「筆様」による制作が主流となり、精緻な楷体、やや崩した行体、粗放な草体の三体を使い分けて絵が描かれました。雪村も、会津や小田原の地において牧谿や玉澗の作品に接していたと見られ、その様式を意識した山水画を描いています。

本章では、雪村が常陸を出発して以降の後半生において、牧谿、玉澗の様式を学び、自身の解釈を取り入れつつ描いていく山水画の様相を見ていきます。

金山寺図屏風　雪村周継筆　笠間稲荷美術館

瀟湘八景図屏風　雪村周継筆　個人

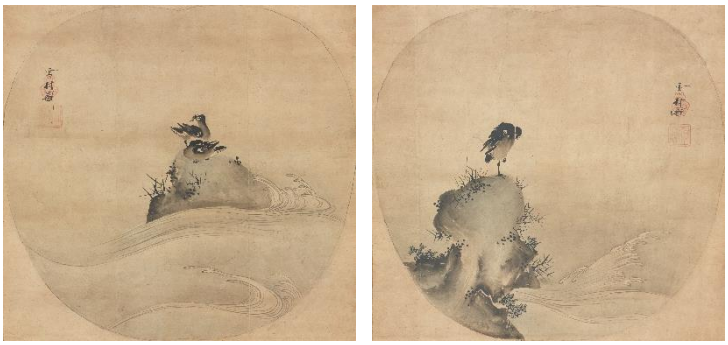
第４章　花鳥・草虫へのまなざし

雪村の作品には、花や鳥、あるいは野菜や昆虫を描いたものが多く残されています。こうした画題は中国に起源を持ち、雪村も中国や朝鮮における古画を参考にして描いていたと見られます。また、彩色を伴う花鳥画には、15 世紀に活躍した雪舟の花鳥画の影響も確認でき、様々な手本をもとに絵画制作を行っていたことが窺えます。

こうした先行作品に基づいた制作を行いながらも、鳥の目や嘴（くちばし）といった細部や、花や葉の質感などは、実物に即して写実的に描かれています。そこには関東各地を遊歴し、山河を歩く中で培われたであろう自然への鋭い観察眼が認められます。

本章では多彩なる墨の濃淡、繊細な筆致が画面上に描き出す生命のかたちを見ていきます。

花鳥図（かちょうず）　雪村周継筆　個人



岩浪小禽図（いわなみしょうきんず）　雪村周継筆　香雪美術館

第５章　人物・動物の躍動

道教の神々や仏教の僧侶、中国の高士などを描く「道釈人物画（どうしゃくじんぶつが）」は、中国絵画において早くから見られる画題です。こうした人物画は、信仰の対象以外にも、説話や故事に対する共感や憧れといった側面から人気を博し、中世水墨画においても多数描かれました。

寿老人や鐘馗（しょうき）といった道教の神々、寒山（かんざん）・拾得（じっとく）や布袋といった正統な法系に属さない禅僧である散聖（さんせい）、常人には計り知れない奇瑞を起こす神仙、蘇東坡（そとうば）や陶淵明（とうえんめい）といった隠棲（いんせい）した中国の人物――。雪村は、こうした人物の他にも、雨を降らす龍や風を呼ぶ虎、軽快に駆け回る馬といった動物を、時に重厚に、時に軽快に描き出しています。

本章では、雪村の真骨頂とも言える、躍動感あふれる人物・動物表現をご覧いただきます。

鐘馗図（しょうきず）

雪村周継筆　個人

欠伸布袋（あくびほてい）・紅白梅図（こうはくばいず）

（うち欠伸布袋（あくびほていず）図）

雪村周継筆　茨城県立歴史館

第６章 雪村に学びて

江戸時代の画史類には、雪村に絵を学び、影響を受けた画家が常陸や奥州において活動していたことが記されています。実際に雪村に付き従って教えを受けたかは定かでないが、雪洞筆《瀟湘八景図》のように雪村作品を直接模写した例もあり、少なからず交流のあった画家もいたと考えられます。江戸時代になると、大名家が所蔵していた雪村作品を狩野派が鑑定・模写し、また、尾形光琳は雪村の作品に影響を受け、構図やモチーフを自分の作品に取り入れています。

本章では、室町時代の雪洞や雪閑、祖栄といった画家や、江戸時代の狩野派や尾形光琳らの作品から、雪村の画風の展開を確認し、彼の影響の大きさについて見ていきます。

瓜茄子に虫図　雪洞筆　正木美術館

蘭図　雪林筆　栃木県立美術館

第７章　クローン文化財とスーパークローン文化財

雪村は国内外を問わず人気を博しており、海外に渡った作品も少なくありません。当館所蔵の《猿猴図》は、アメリカ・フリーア美術館所蔵の《寿老人図》と合わせて３幅対として伝来していましたが、分蔵されて久しいです。

こうした状況に対し、フリーア美術館を擁するスミソニアン博物館、東京芸術大学との共同事業において、現状の姿を紙や絵の具の成分、表面の凹凸質感まで忠実に再現したクローン文化財、ならびに劣化や損傷部分をデジタル補正し、制作当初の状況を想定復元したスーパークローン文化財を作成しました。これにより、各美術館で３幅が揃って展示できることとなりました。

本章では、その成果を紹介し、文化財を幅広く活用していく当館の活動を紹介していきます。

猿猴（えんこうず）図　雪村周継筆　茨城県立歴史館

寿老人図（クローン文化財）
雪村周継筆　茨城県立歴史館
（原資料：フリーア美術館）

寿老人図（スーパークローン文化財）
雪村周継筆　茨城県立歴史館
（原資料：フリーア美術館）

（史料学芸部　学芸課　学芸員　蔀政人）

史料紹介

「(東京市内電信興行諸費概算)」

当館寄託資料「飯村真琴家文書」は下妻市黒駒で代々名主を務めていた飯村家に伝えられた資料群で、黒駒村の人別、年貢関係の文書など、近世前期から昭和20年代までの文書570件742点を公開しております。また飯村家は、明治から大正期に茨城の発展に寄与した政治家で実業家でもある飯村丈三郎の生家でもあり、資料群には丈三郎の関係文書も含まれています。この度、「飯村真琴家文書」に新たに彼の事業に関する史料を含む、465件551点の史料が追加寄託されました。その中から大変興味深い史料を1点紹介したいと思います。

丈三郎は第六十二国立銀行（現在の常陽銀行）の再建、水戸鉄道（現在の水戸線）の開業、第1回2回の衆議院議員、いはらき新聞社長、茨城中学校（現在の茨城中学校・高等学校）創立、岡倉天心をはじめとする芸術家たちとの深い親交など、政治・鉄道・金融・保険・出版・教育・経済・文化・芸術など幅広い分野で才能を発揮し、茨城の近代化の立役者ともいうべき人物です。今回ご紹介するのは、丈三郎が電信に関する事業にも関心を寄せていたことが分かる史料です。

史料名：　「(東京市内電信興行諸費概算)」(飯村真琴家文書№1023)

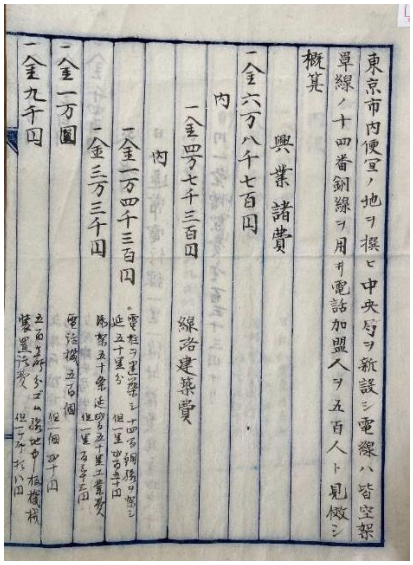
わが国の電信事業は『増補明治事物起原』「第九編　交通部　電話の始」[1]によると、明治21年（1888）1月、東京電信局と熱海電信局間において、往復線を架設して電話実験が開始され、同年5月には静岡まで延長、さらに大阪まで延長して成功を納め、翌明治22年(1889)1月1日、一般向けの東京-熱海間の電話通信が始まったとされています。

そうした中、前述『起原』によると「電話需要の気運は、此頃より漸く盛んに起り始めんとするを見て、東京の豪商中、電話交換の会社設立を出願したる者有り」と、当時東京の豪商らが電話交換の会社を設立しようとする動きがあったとあります。確かにその頃の新聞を調べてみると、同年３月２７日の東京朝日新聞に、

「川崎東作　飯村丈三郎　松本直己　小野金六　原亮三郎の五氏発起にて東京電話会社なるものを興し、当分本社を日本橋区本白金町三丁目二番地器械会社内に置く筈にて一昨日其筋へ出願せり　其資本金は二十万円にて営業期限は二十五ケ年なりと」

という記事を確認することができました。飯村丈三郎は他４名の発起人とともに、東京電話会社を興し、東京市内の電話事業に乗り出そうとしていたことが分かります。今回、史料整理をする中で、この動きを裏付ける史料が見つかりましたのでご紹介します。

1　石井研堂　『明治文化全集別巻　増補明治事物起原』「第九編　交通部　電話の始」（日本評論社）763頁　以下『起原』と表記する。



東京市内便宜ノ地ヲ撰ヒ中央局ヲ新設シ電線ハ皆空架
単線ノ十四番銅線ヲ用ヒ電話加盟人ヲ五百人ト見做シ
概算

興業諸費

一金六万八千七百円

内

一金四万七千三百円　線路建築費

内

一金一万四千三百円　電柱ヲ建築シ十四間銅線ヲ架シ
延五十里分　但一里二百五十円

一金三万三千円　添架五十条延二百五十里工業費
但一里百三十三円

一金一万円　電話機五百個
但一個二十円

一金九千円　五百ヶ所分ゴム線地中板機械
装置諸費　但一ヶ所十八円

一金七百円　交換器（スウイッチボールド）　七百人前

一金三百円　交換所機械台其他
局内装置諸費

一金千四百円　交換中央局惣二階建煉瓦造
三十五坪造作共　但一坪四十円

参考

日本通常電信線一里一線新築費凡金二百八十六円ナリ

同一条増築費金百三十三円ナリ

この史料は４枚の罫紙が袋綴じにされているもので、見開き８頁分の内容となります。表題部分に「東京市内便宜ノ地ヲ選ヒ、中央局ヲ新設シ、電線ハ皆空架単線ノ十四番銅線ヲ用イ、電話加盟人ヲ五百人ト見做シ概算」とあります。東京市内便宜の地を選んで、仮に電話を置けると思われる家を 500 か所程と見込み、興行の概算を出してみたものです。

興業諸費を詳しく見ていきましょう。

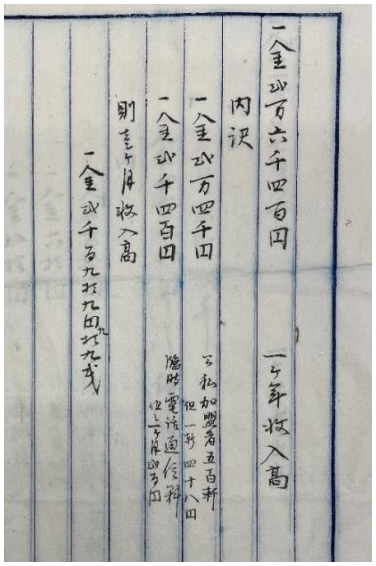
事業を興す中で、最大の経費は当然ながら電話線の線路建築費であったことが分かります。電話機は会社が1個20円で500個分用意しているのも興味深いところです。電話交換中央局は35坪の敷地に惣二階建て、煉瓦造りとしています。

次のページに1か年の収入高の見込みも記載されています。収入の見込みとして、1年で26,400円を見込んでいます。内訳は、

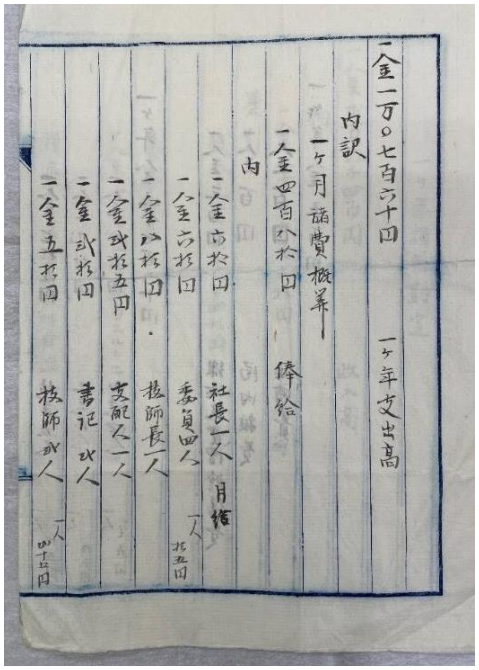
①公私加盟者500軒として、1軒48円　　48円×500軒　合計24,000円の収入

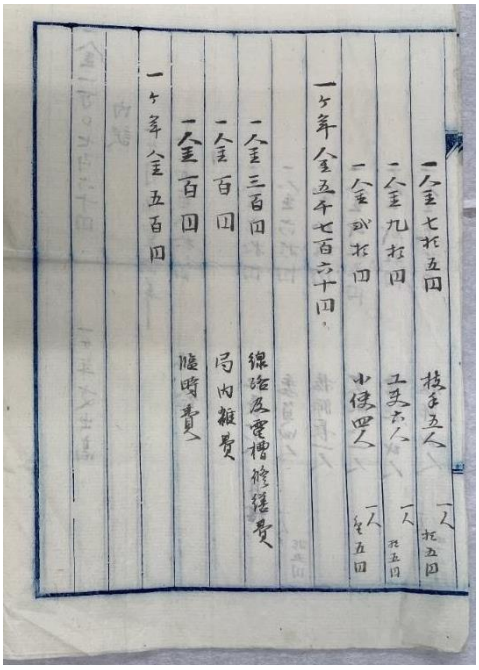
②臨時電話通信料として、1ケ月200円　　200円×12か月　合計2,400円の収入

1か月あたりにすると2,199円99銭の収入となると試算しています。


一金弐万六千四百円　一ヶ年収入高
内訳
一金弐万四千円　公私加盟者五百軒 但一軒四十八円
一金弐千四百円　臨時電話通信料 但一ヶ月四百円
別ニ一ヶ月収入高
一金弐千百九拾九円九十九銭

続いて、事業を経営するにあたっての支出概算がでていますので、これもみていきましょう。俸給と線路及び電槽の修繕費、局内雑費、臨時費に項目が分けられています。


一金一万〇七百六十円　一ヶ年支出高
内訳
一ヶ月諸費概算
一金四百八拾円　俸給
内
一金六拾円　社長一人 月給
一金六拾円　委員四人 一人拾五円
一金八拾円　技師長一人
一金弐拾五円　支配人一人
一金弐拾円　書記弐人
一金五拾円　技師弐人 一人四十五円


一金七拾五円　技手五人 一人拾五円
一金九拾円　工夫六人 一人拾五円
一金弐拾円　小使四人 一人金五円
一ヶ年金五千七百六十円
一金三百円　線路及電槽修繕費
一金百円　局内雑費
一金百円　臨時費
一ヶ年金五百円

一　金一万〇七百六十円　一ヶ年支出高

内訳

一ヶ月諸費概算

一　金四百八拾円　俸給

内

一　金六拾円　社長一人　月給

一　金六拾円　委員四人　一人拾五円

一　金八拾円　技師長一人

一　金弐拾五円　支配人一人

一　金弐拾円　書記弐人

一　金五拾円　技師弐人　一人弐十五円

一　金七拾五円　技手五人　一人拾五円

一　金九拾円　工夫六人　一人拾五円

一　金弐拾円　小使四人　一人金五円

一ヶ年金五千七百六十円

一　金三百円　線路及電槽修繕費

一　金百円　局内雑費

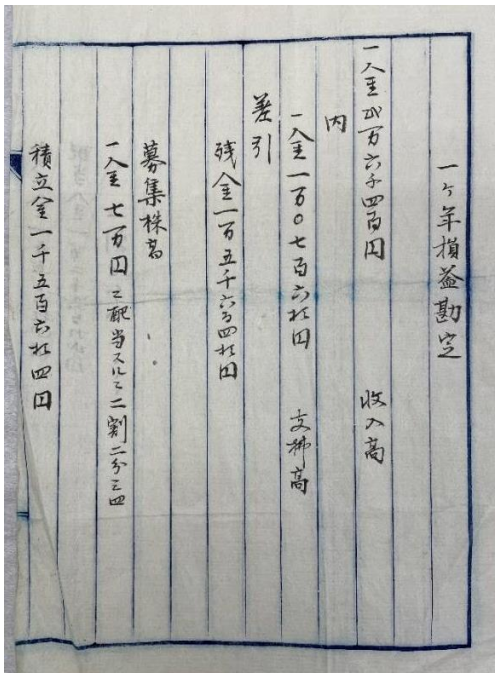
一　金百円　臨時費

一ヶ年金五百円

俸給に関し、社長より技師長の方が高給である点が興味深いです。当時電信電話に関する技術や知識をもった人物は少なかったためと予想されます。電話会社の設立には当然専門的知識をもった人物が必要ですから、かなりの高給で抱えようとしていたのでしょう。俸給の一年分の見込みは総額 5,760 円です。

一方、俸給以外の経費概算はかなり少なく見積もられています。電線は空架ですので台風や落雷、地震、火災などの天災に加え、物の落下や引っ掛けなどの人為的なハプニングが少なからず起きるはずです。興業計画書の電線敷設費用を見ても、一里あたり電線を引くには 250 円と概算しているのを見ると、1 年あたり 300 円のインフラ整備費用ではあまりにも少なすぎるように感じます。ただ、1 か年の支出高の見込み 10,760 円としているものの、俸給分 5,760 円と諸費 500 円を足しても、まだ 4,500 円分が計上されていないので、余白にはまだ必要経費として何か記入する予定だったのか、あるいは記入の誤りかの可能性があります。

損益勘定の見込みが最後のページに記載されています。


一ヶ年損益勘定
一　金弐万六千四百円　収入高
内
一　金一万〇七百六拾円　支払高
差引
残金　一万五千六百四拾円
募集株高
一　金七万円ニ配当スルニ二割二分三四
積立金　一千五百六拾四円
賞与金　一千五百六拾四円
配当金　一万弐千五百拾弐円
一割七分八七…

収入から支出を差し引くと、1か年の利益は15,640円を見込んでいます。また、この事業を興す際はその資金調達のため株を募集し、その中から一部を積立金と賞与金、株の配当金に充てる計画だったということも分かります。

さて、この会社設立事業はその後どうなったのでしょうか。『起原』によると「此事業は電信と同じく政府所管と為すに決し」、まもなく電話交換業務は、逓信省により官営で提供されることになりました。これは、同地域に複数の業者がそれぞれ電話事業を行うのは、膨大な設備投資が必要な通信事業においては非効率であること、また事業の公共性や技術的統一性の必要、技術者の圧倒的不足からみても、民間の参入は難しかったことによると考えられます。

丈三郎らの事業は、いわば幻の計画となってしまったのですが、この史料は、電話事業に係る具体的な試算が記され、国の通信事業の黎明期を伺い知る貴重なものであるといえましょう。

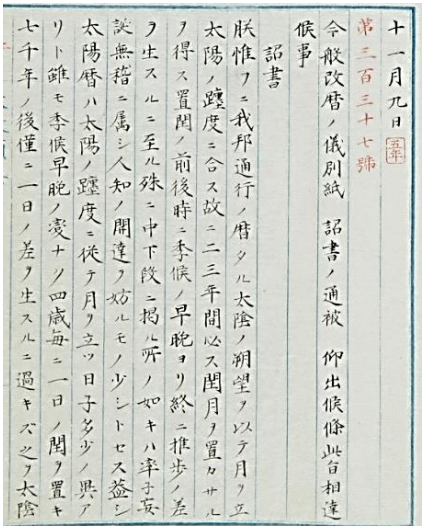
（史料学芸部　歴史資料課　研究員　沼澤佳子）

史料紹介

明治期茨城の鉄道のあゆみ－水戸鉄道、常磐線を中心として－

わが国に初めて鉄道が開業したのは、旧暦の明治５年(1872) ９月 12 日のことです。

ここで少し暦の話題に触れますが、江戸時代の末期には、月の満ち欠けを基準とした太陰太陽暦（天保暦）が使われていました。外国との交流が始まると、太陽暦を使っている西欧諸国と暦を揃える必要が生じます。明治新政府は、明治 5 年 11 月 9 日に、「1 年を 365 日とし、それを 12 か月に分け４年に１度閏（うるう）年を設けること」、「１日を 24 時間にすること」を、太政官布告第 337 号で公布しました。旧暦の明治５年(1872)12 月 3 日が、新暦の明治 6 年(1873)1 月 1 日になりました。鉄道開業の日は、新暦にあらためると 10 月 14 日になります。


十一月九日
第三百三十七號
今般改暦ノ儀別紙　詔書ノ通被　仰出候條此旨相達
候事
詔書
朕惟フニ我邦通行ノ暦タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立
太陽ノ躔度ニ合ス故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサル
ヲ得ス置閏ノ前後時ニ季候ノ早晩ヨリ終ニ推歩ノ差
ヲ生スルニ至ル殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ率子妄
誕無稽ニ属シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス蓋シ
太陽暦ハ太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異ア
リト雖モ季候早晩ノ変十ノ四歳毎ニ一日ノ閏ヲ置キ
七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キズ之ヲ太陰

左は太政類典第二編
（国立公文書館所蔵）
右は太政官布告第 337 号

大正 11 年(1922)、鉄道省は 10 月 14 日を「鉄道記念日」と定めます。戦後、昭和 24 年(1949)に日本国有鉄道の記念日となり、昭和 62 年(1987)の国鉄分割民営化後もＪＲ各社は記念日として扱いました。

平成 6 年（1994)、運輸省（現国土交通省）は「ＪＲ色が強すぎる」ことを理由に、名称を「鉄道の日」とあらため、私鉄を含むすべての鉄道事業者が祝う日となりました。

秋に鉄道に関する展示会が多く行われるのは、このような理由からではないでしょうか。

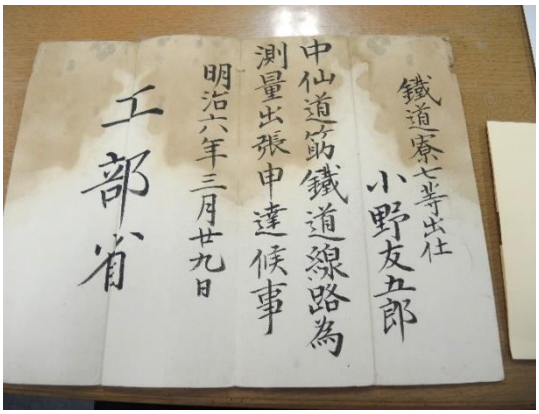
１　鉄道敷設用地の測量に尽力した小野友五郎

（小野友五郎については「歴史館だより」第 125 号参照）

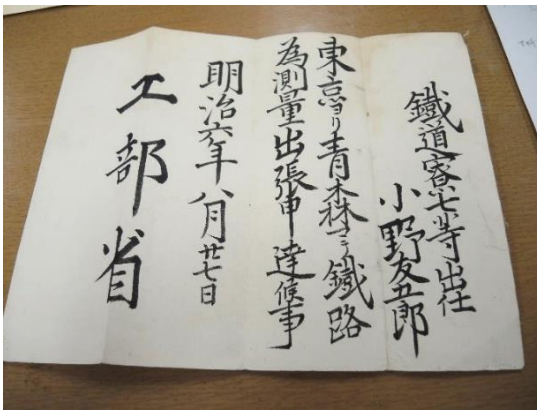
わが国で最初に鉄道が開業したのは新橋～横浜間です。新橋駅は現在の汐留駅、横浜駅は現在の桜木町駅にあたります。敷設にあたったのは、エドモンド・モレル技師長が率いるイギリス人技師団でした。このとき、狭い日本の実情に合わせて軌間を３ft６in（1,067mm）としたと言われています。

線路敷設に先立ち用地測量に従事したのは、笠間藩下級藩士の出身である小野友五郎です。小野は、同じ笠間藩士の小守庫七（こもり・くらしち）の四男として生まれ、小野家に養子に出されます。甲斐駒造（かい・こまぞう）の塾に入門し和算を学び、甲斐が著した初学者向けの測量技術書『量地図説』の校閲を任されました。和算に優れた小野は、やがて江戸に出て、陪臣（ばいしん）の身ながらも長崎海軍伝習所１期生となり、オランダ教師から洋算や航海術を学びます。万延元年(1860)に、日米修好通商条約批准書交換使節の随行船である咸臨丸（かんりんまる）の教授方筆頭測量士（航海長）としてアメリカにわたり、その際の見事な操船の手柄により第 14 代将軍・徳川家茂（とくがわ・いえもち）に単独で謁見（えっけん）を許されるという栄誉に預かります。その功績により幕臣に取り立てられ、才覚を発揮し、やがて勘定奉行並まで昇進を遂げました。

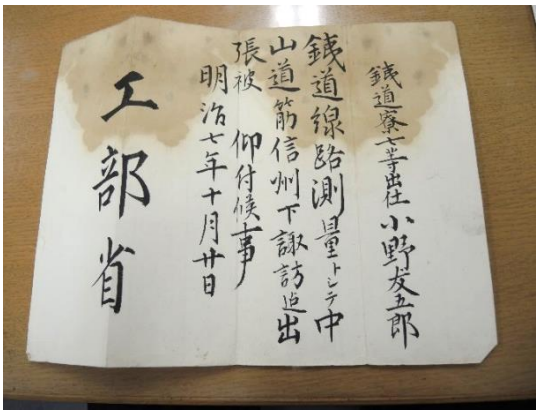
明治維新を迎え、幕臣であった小野は、新政府軍との戦いで幕府方の兵站（へいたん）業務を担ったことから捕らえられ入牢されます。赦免（しゃめん）後もしばらく謹慎していましたが、小野の優れた航海術を見込んだ明治政府から、海軍への出仕を度々命ぜられます。小野は断り続けましたが、民部省鉄道掛からの声掛けに応じ、先述のとおり新橋～横浜間の鉄道敷設のための測量を指揮しました。その後も東海道・中山道・奥羽道の鉄道路線の測量調査に尽力しました。



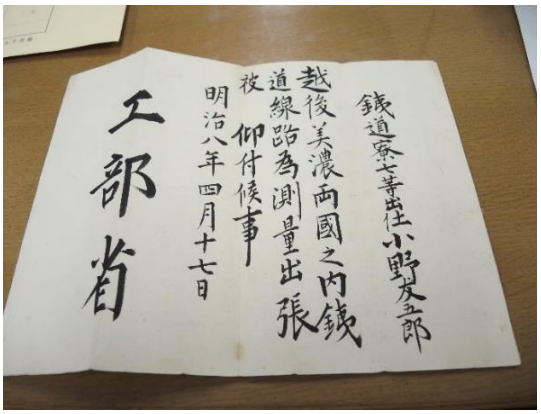
① 中仙道筋（明治６年３月）



② 東京ヨリ青森（明治６年８月）



③ 中山道筋信州下諏訪（明治７年）



④ 越後美濃両国（明治８年）

（①～④ 広島県立文書館所蔵）

２　水戸鉄道の開業

茨城県内で最初に鉄道が通った駅は、大宮～宇都宮間を結んだ日本鉄道古河駅で、開業は明治 18 年(1885) 7 月 16 日のことでした。

日本鉄道は、日本初の私設鉄道会社として岩倉具視ら華族の資金を集めて営まれます。最初に上野から熊谷が開業し、その後高崎、前橋近くまで延伸します。続いて赤羽～品川間が開業します。これは、上州で産する生糸を横浜港から輸出するためでした。渋沢栄一(天保 11 年～昭和６年)の従兄弟で、民部省の役人から富岡製糸場初代工場長となった尾高惇忠(文政 13 年～明治 34 年)によれば、「操婦は兵士に勝る」とまで言わしめます。このような理由から、この区間の鉄道敷設が優先されたのです。

次いで、大宮～白河間、白河～仙台間、仙台～盛岡間、そして盛岡～青森間が順次開業します。上野～青森間が全線開通したのは、明治 24 年(1891) 9 月 1 日のことです。現代に例えれば、最初に高崎線が開通し、次に宇都宮線が続いたという感じです。次は、ようやく常磐線かと言えば、そうではありませんでした。

県内で、本格的な開業を最初に迎えた鉄道は水戸鉄道です。日本鉄道の小山駅を起点として、結城、下館、笠間を経由し、水戸と結びました。開業は、明治 22 年(1889) 1 月 19 日のことでした。

水戸鉄道は、東京川崎財閥の前身である川崎組、川崎銀行の創始者である川崎八右衛門(天保 5 年～明治 40 年)、水戸徳川家の家令を務めた長谷川清、県北部の豪商である嚆戴（はなわ・さい)、飯村丈三郎（嘉永６年～昭和２年）らの出資で開業しました。

飯村は水戸鉄道以外にも、茨城新聞社、常陽銀行の前身のひとつである国立第六十二銀行、私立茨城中学校創設など、県内のさまざまな事業に関わった実業家です。

水戸鉄道は開業２年後の明治 24 年(1891)に、財産の全てを日本鉄道に譲り渡しました。

同じ時期に、水戸を起点とし長岡、石岡、土浦を通り、下妻、諸川、古河に繋がる常総鉄道敷設計画が提出されました。土浦の醤油醸造商で、衆議院議員の色川三郎兵衛(天保 13 年～明治 38 年)らによりものでしたが、この計画は実現しませんでした。

３　日本鉄道会社土浦線・磐城線（現在の常磐線）の開業

水戸鉄道が日本鉄道会社の一路線となった後、同社は土浦と結ぶ鉄道路線建設に取りかかります。

明治 28 年(1895)7 月 1 日、水戸鉄道の宍戸～内原間に友部停車場が設けられ、そこを分岐点として、同年 11 月 4 日に友部～土浦間が開通します。翌 29 年 12 月 25 日には、土浦以南が東京の田端駅と結ばれます。土浦線は当初の計画では、埼玉県川口から分岐して土浦・石岡を経て水戸に至る計画でしたが、監督官庁からは経由地を「見なおす」よう通達が出されていました。

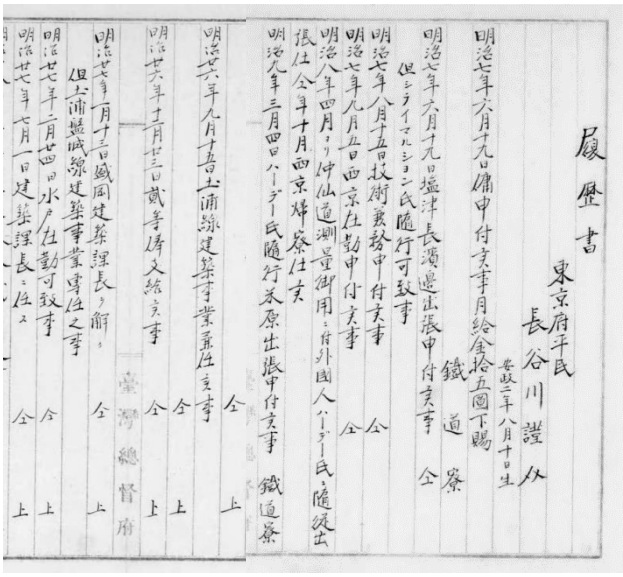
水戸以北は、明治 30 年 2 月 25 日に、日本鉄道磐城線として水戸～平（現いわき）間が開通します。建設には磐城地方の郡長を歴任し、のちに衆議院議員となった白井遠平（弘化３年～昭和２年）の尽力がありました。白井は郡長務めのかたわら、磐城地区で産出する石炭

の効率的な輸送方法を研究し、福島県知事の許容を得ながら、有力者に対して鉄道事業への参加を取り付けます。

旧下孫駅（現常陸多賀駅）前に、開通１年を記念して建立された「下孫停車場紀年碑」があります。篆額と撰文は詩人野口雨情の伯父で衆議院議員の野口勝一によるものです。日本鉄道土浦線と磐城線を合わせて常磐線と呼びますが、常磐線は常磐炭田の石炭を京浜工業地帯に直送し「産業の振興を図る」ことを目的に計画された路線です。その建設にあたった人物として、後に台湾南北縦貫線敷設に尽力し「台湾鉄道の父」とも呼ばれ、鉄道院副総裁に登りつめた長谷川謹介（安政２年～大正 10 年）がいます。

独立行政法人国立公文書館が所蔵する史料によれば、長谷川は明治 26 年(1893)9 月 15 日付で、日本鉄道会社盛岡建築課長と常磐線建築事務の兼務を命じられます。翌 27 年(1894)7 月 1 日には土浦常磐線建設事務所が水戸建築課と改称され、謹介は建築課長として常磐線の建築に専任することになりました。中濱武彦氏が著した『開拓列車に乗せたメッセージ』によれば、東京、京都の両帝国大学の工学部からも「長谷川という人物は誠実な英国型の紳士で、技術に堪能な自信家でもある。仕事については相当に厳しい指導をするそうだが、論理的であり、仕事を教えてもらうには最適な技術者である」との評価を得たと言われており、そのような理由から常磐線はエリートの学士が数多く働く現場となりました。長谷川に育てられた技術者たちは彼を追って台湾にまで渡り、台湾南北縦貫鉄道の建設に力を尽くしたのでした。

下孫停車場紀年碑

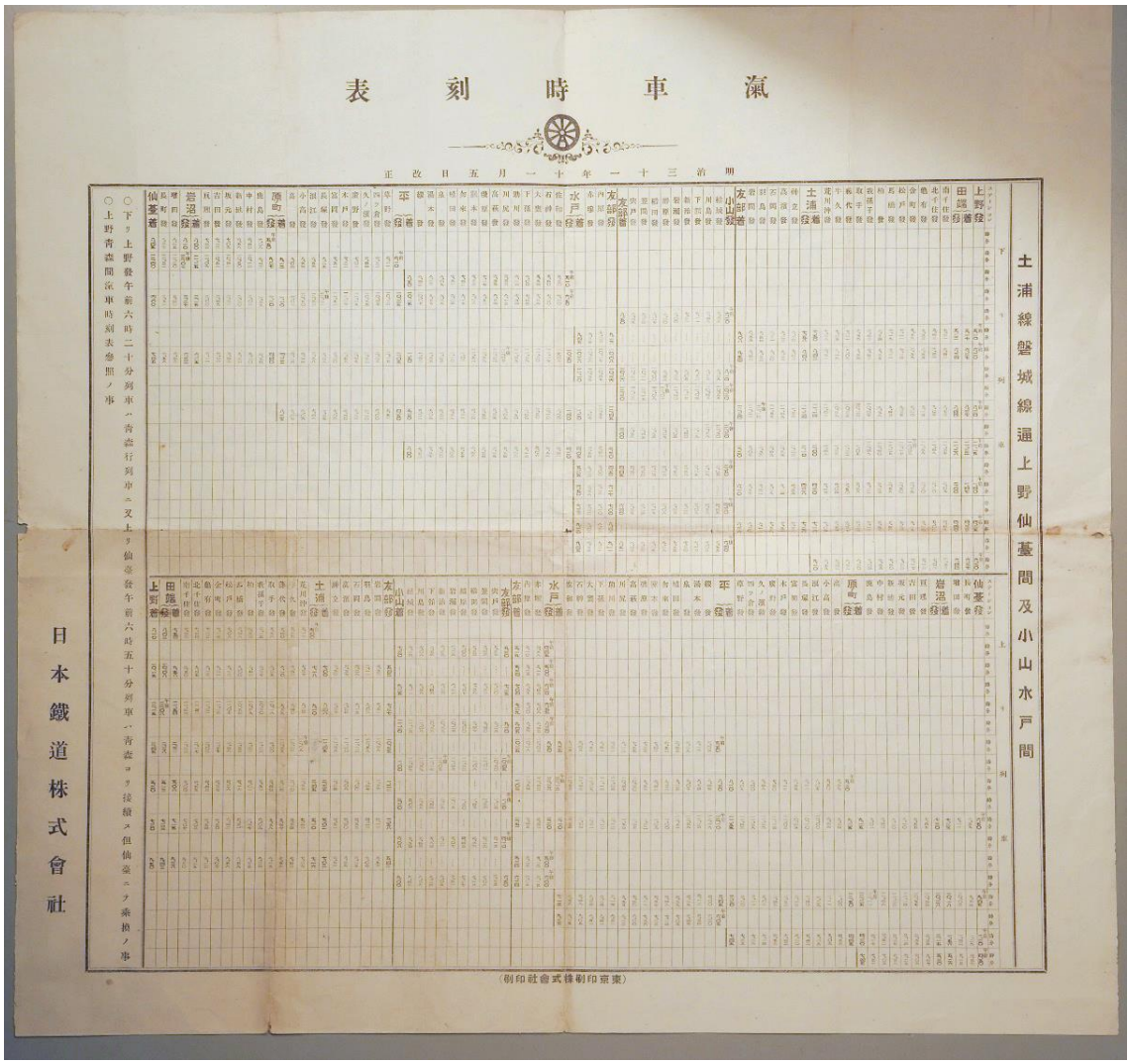


長谷川謹介履歴書　国立公文書館デジタルアーカイブ

史料紹介1

汽車時刻表（明治 31 年 11 月 5 日改正）土浦線岩城線通上野仙台間及小山水戸間

当館寄託（請求番号　五十野家文書 120）



史料１は、開業から間もない時期の常磐線と水戸線の時刻表です。常磐線の当時と現在を比較してみましょう。

○上野から仙台までの駅（当時は田端駅経由で、後に日暮里経由で上野駅乗り入れとなる）

上野、田端、南千住、北千住、亀有、金町、松戸、馬橋、柏、我孫子、取手、藤代、牛久、荒川沖、土浦、神立、高浜、石岡、羽鳥、岩間、友部、内原、赤塚、水戸、佐和、石神、大甕、下孫、助川、川尻、高萩、磯原、関本、勿来、植田、泉、湯本、綴、平、草野、四ツ倉、久ノ浜、広野、木戸、富岡、長塚、浪江、小高、高、原ノ町、鹿島、中村、新地、坂元、吉田、亘理、岩沼、増田、長町、仙台　以上、60 駅

○当時と現在で名称が異なる駅

石神→東海、下孫→常陸多賀、助川→日立、川尻→十王、関本→大津港、綴→内郷、平→いわき、長塚→双葉、高→磐城太田、中村→相馬、吉田→浜吉田、増田→名取

○明治 31 年より後に設置された駅

日暮里、三河島、天王台、龍ケ崎市（佐貫）、ひたち野うしく（万博中央）、偕楽園、勝田、小木津、南中郷、末続、Ｊヴィレッジ、竜田、夜ノ森、大野、桃内、日立木、駒ヶ嶺、逢隈、館腰、南仙台、太子堂

○水戸駅を発着する列車

（明治 31 年）１日当たり下り 12 本、上り 12 本

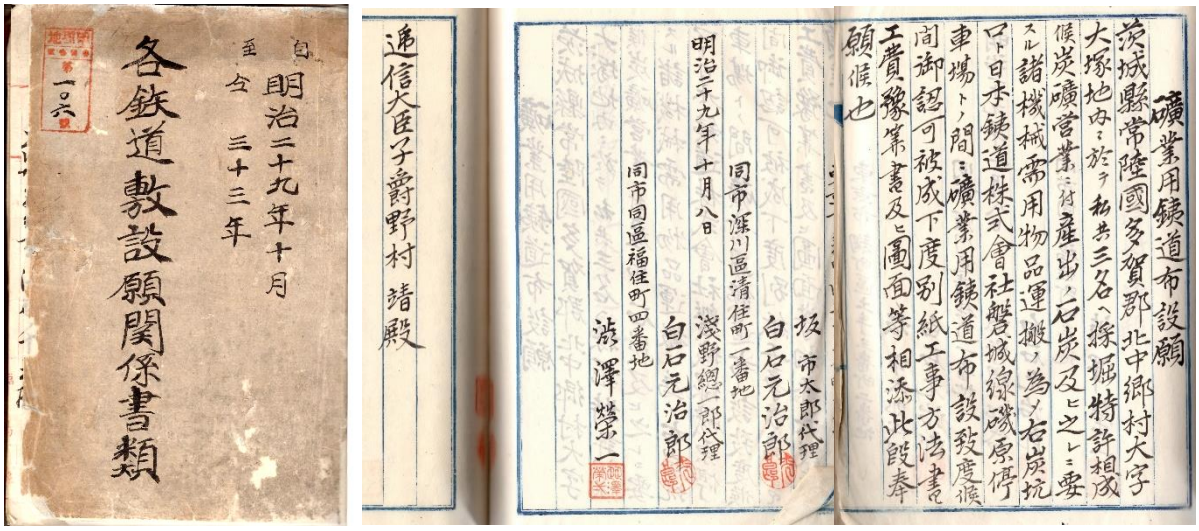
（令和６年）　１日当たり下り 105 本、上り 87 本

史料紹介2

「各鉄道敷設願関係書類」

明治 29 年(1896)10 月～同 33 年(1900)

当館（請求番号　行 N-8）



常磐線は、常磐炭田から産出する石炭を京浜地区に運搬するために敷設されましたが、炭鉱から最寄り駅までの輸送手段も必要です。写真の史料は、現在の北茨城市の大塚から産出する石炭を、磯原駅まで運搬するための礦業用鉄道の布設を願い出たものです。出願者には、石狩炭鉱の発見者で炭鉱経営者の坂市太郎（ばん・いちたろう）、セメント王と呼ばれ浅野財閥創始者の浅野総一郎、そして肖像が一万円札に採用された実業家渋沢栄一の名前が見られます。

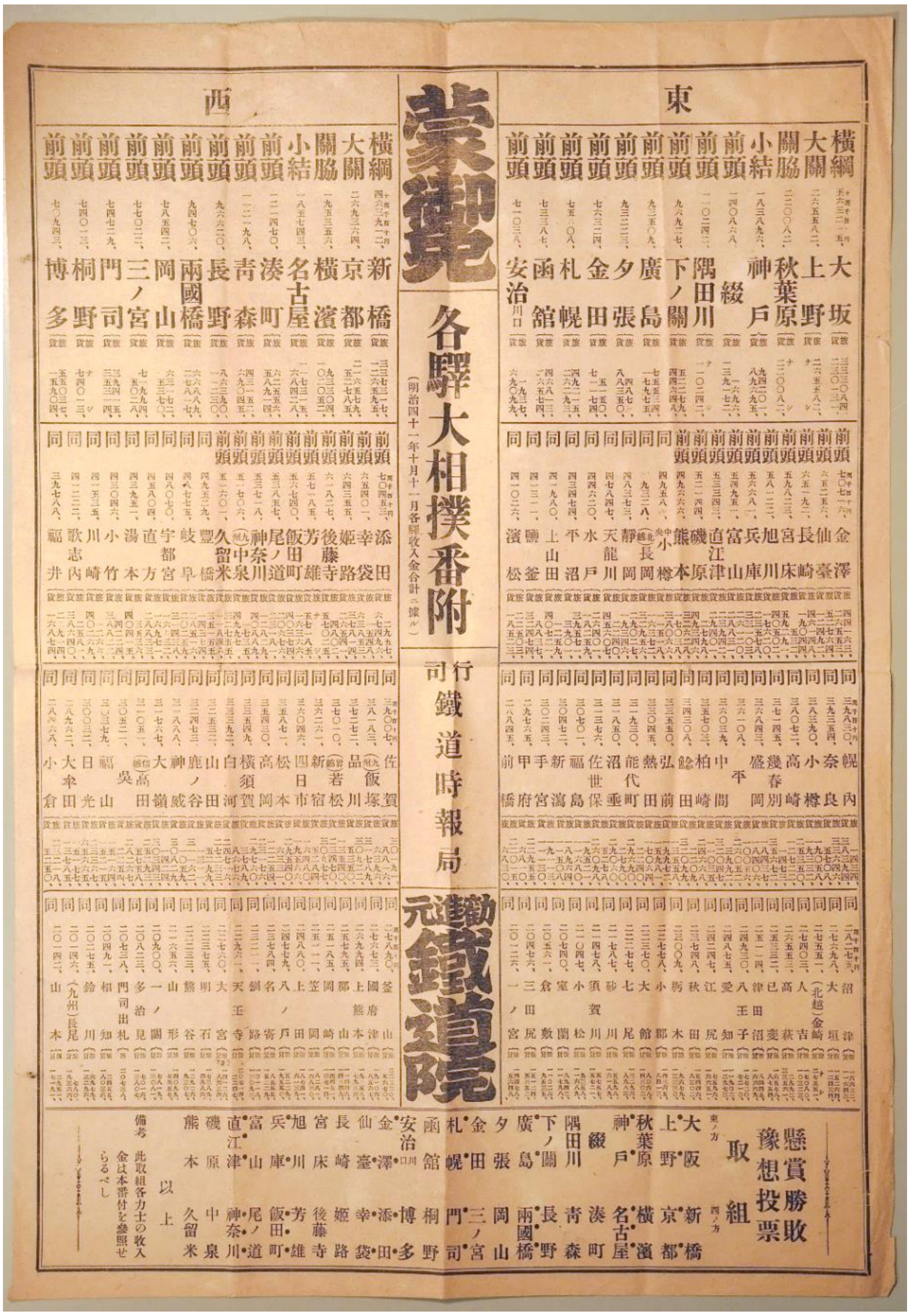
宛先は逓信大臣子爵野村靖となっており、茨城県を経由して逓信省に進達する流れでした。本県に残された文書は控えで、本文中の後ろから３列目に別紙工事方法書、工費予算書及び図画等、相添えとありますが、これらは１部のみであったのか控えが残されていません。県が粗略に写し取ったものが綴られていますが、主任技師長谷川謹介の名が読み取れます。

史料紹介3

「各駅大相撲番附」

明治 41 年(1908)10 月

当館（請求番号　牛米努氏収集資料 3）



史料３は、明治 41 年（1908）当時における各駅の旅客と貨物の取扱高を、大相撲の番付表に例えた興味深い史料です。番付表から読み取れることをまとめて紹介します。

○番付表に見られる常磐線の駅

綴（内郷）　磯原　　水戸　　湯本　　平（いわき）　高萩

・水戸駅以外は、常磐炭田からの石炭積出駅といえます。

○番付表から読み取れる、明治 41 年(1908)時点の特徴

・石炭産出地の取扱高が大きい

（筑豊炭田）金田、桐野、添田、中泉、直方、中間、飯塚、長尾など

（石狩炭田）夕張、幌内、幾春別、神成、砂川など

・東京駅がまだ存在していない。開業は、大正３年(1914)12 月 20 日

官設の新橋駅と、日本鉄道を発祥とする上野駅を結ぶ中央停車場として建設される

県立歴史館は、文書館と博物館の二つの機能を有する施設として設置され、それからすでに 50 年を超えております。これまでに当館が収集した文書史料、行政資料、図書等は 50 万点を超えております。紹介した史料１～３は、当館の閲覧室でご覧いただくことが出来ます。閲覧室の利用方法につきましては、下のリンク先をご参照ください。

（当館 HP　閲覧室のご案内）

https://rekishikan-ibk.jp/archives/reading-room/

（史料学芸部　行政資料課　資料調査専門員　富田任）

トピックス
令和６年度　下半期の歴史館

○日曜歴史館

下半期は、当館職員による５つの講座（１つは中止）を開催し、多くの方々に受講いただきました。

・「岩上二郎と史料保存」（10 月 13 日）
・「徳川光圀・斉昭と蝦夷地」（11 月 3 日）
・「(一橋徳川家記念室展示関連)一橋徳川家の領知」（12 月 1 日）
・「立原杏所 画境の夢－唐画と関東南画－」（１月 12 日）（中止）
・「藤田東湖と女性たち」（２月９日予定）
・「(春の特別展関連)雪村周継の画業と名品の魅力」（３月２日予定）

○歴史館いちょうまつり（11 月２日～11 月 24 日）

歴史館のいちょう並木が、黄葉の見頃をむかえる季節、様々なイベントやライトアップを実施しました。10 日、13 日の２日間は、10 時 30 分から 15 時まで、庭園及び館内にてイベントを開催しました。「古文書相談会」、「チャレンジ！昔のあそび」、「わらじ作り体験」など当館出展のイベントをはじめ、「子ども伝統文化フェスティバル」、「県民の日コンサート」、「歴史館講談会」等の県内の様々な団体と連携したイベント、「石の立体アート」、「きもの体験」、「お茶会」等の体験イベント、大学生による学校資料の解説等を開催し、各会場で来館者の皆様に楽しんでいただきました。

16 日、17 日の２日間は、ナイトタイムミュージアムを開催し、17 時から 19 時 45 分までの間、展示室を無料で開放いたしました。また、恒例となっている旧水海道小学校本館でのプロジェクションマッピングは、18 時から各日４回上映しました。

４日、23 日には、50 周年を記念した当館初のイベント、「いちょう並木ストリートピアノ＆コンサート」を開催しました。いちょう並木の下にグランドピアノを設置し、来館者の皆様に自由に演奏していただきました。また、ゲスト演奏として、４日は菊池 亮太 氏、23 日

は石井 里佳 氏をお招きし、いちょう並木にてミニコンサートを開催しました。たくさんの方々に、いちょう並木の景色とピアノの音色を楽しんでいただきました。同日、旧水海道小学校本館ピアノ室でのピアノコンサートも開催しました。このグランドピアノは 1865 年（慶応元年）にスタインウェイ＆サンズ社で製造されたもので、現存国内最古とされます。コンサートの参加者は、ピアノの優しい音色に聴き入っていました。

夜間の庭園では、２日から 24 日までの 23 日間、いちょう並木のライトアップを実施しました。13 日からは和傘ライトアップや光の道ライトアップ等を実施し、16 日、17 日には、近隣小学校の協力を得て作成したキャンドルで庭園を飾りました。

今年も、たくさんの方々に歴史館いちょうまつりを楽しんでいただきました。

○教育普及事業

１．「子どもの歴史くらぶ」

「金継ぎ体験（美術保存修復体験）」（９月 15 日）

講師に栃木県指定伝統工芸士である伊原 実穂 氏をお招きし、当館講堂にて開催しました。日本ならではの伝統技法「金継ぎ」の体験で、欠けた器に新たな命を吹き込みました。

２．「忍者あそび」（11 月 30 日）

ＮＰＯ法人水戸子どもの劇場による「忍者あそび」を実施し、講堂及び庭園を使った様々な修行を通して忍者を目指しました。今年は落ち葉を使った修行が盛り上がりました。

３．「歴史館ピアノコンサート」（12 月 21 日）

歴史館の野外施設である旧水海道小学校本館にて開催しました。ピアニストの秋葉 桃子 氏をお招きし、前述の 1865 年製造、スタインウェイ＆サンズ社製のグランドピアノでクリスマスの名曲を楽しみました。

４.「歴史館探検ツアー」（１月 19 日）

展示室のほか普段見ることのできない収蔵庫などを見て回り、歴史館を身近に感じることが できる人気のイベントです。目を輝かせながら研究員の話に耳を傾ける子どもたちの姿が印象的でした。

〇歴史館ボランティア

今年度も、歴史館ボランティアに学校団体等を対象とした旧水海道小学校本館、旧茂木家住宅の解説をはじめ、よろい かぶと体験、歴史館まつり、チャレンジ！昔のあそび、いちょうまつり、十二単試着体験等の様々なイベント運営にご協力いただきました。

各イベントについてのお問い合わせは、

茨城県立歴史館　教育普及課　、TEL：029-225-4425

または、ホームページの「お問い合わせ」からメールをお送りください。